

第 31 号の刊行にあたって

学園長 島崎 弘幸

令和 2 年度は、コロナ感染症による世界的な大流行（パンデミック）で、本校も多大な影響を受けました。新入生の減少に伴い私立学校としての経営環境は大変厳しいものですが、コロナ禍での中小企業や各種事業所への公的支援は、公益財団（当該専門学校）まで届きませんでした。教育面でも、感染症対策として実施した臨時休業や、リモート学習、夏休みを短縮しての授業や補講など。学生や教職員にとっても厳しい対応の求められる一年でした。しかしながら、本校では学生や教職員全員の努力もあり令和 2 年度に予定したカリキュラムは、ほぼ滞りなく実施することが出来ました。不自由な中、それらを取り切った学生諸君の努力を褒めたいと思います。また、同時に先生方の努力もありました。ここにお届けする「鯉淵学園 教育研究報告」は、多忙な中で先生方の努力の結晶です。学生・教職員が、コロナに負けないで全員で頑張った証と言うことが出来るでしょう。令和 2 年度の「鯉淵学園 教育研究報告 第 31 号」を刊行できることを学園長として誇らしく思います。

「農業の未来」をキーワードに Google で検索してみると、スマート農業、先端技術、IoT（Internet of Things；モノのインターネット）、AI（Artificial Intelligence；人工知能）などの言葉が検出できます。関連キーワードでは「農業これから伸びる」、「これからの農業 儲かる」、「これからは農業の時代」という明るい話題が目につく一方、「農業人口の流出」、「農家の後継者不足」、「農業従事者の高齢化」など良く知られた負の課題も見ることが出来ます。このような言葉で代表される「農業の未来」を取り巻く時代背景の下で、鯉淵学園農業栄養専門学校が、ど

のような人材、新しい時代に即した教育を推進しようとしているか明確にすることを、本校へ進学を希望する若い諸君、或いはご両親を初めとする多くの皆様から求められていると思います。ここではアグリビジネス科を中心に、学園長としての考えを述べます。

新しい時代に即した農業関連のキーワードには、スマート農業、先端技術、IoT、IT、AI といった新鮮で魅力的な言葉があります。ただ、これらの言葉は、いずれも農業を支える革新的な技術や道具であり、農業そのものではありません。農業教育の本質は、土壌の健康状態に気を配り、種をまき、日々変わる天候や風雪に気を配りながら、作物を育てることであり、昔も今も、そして未来も変わることはありません。スマート農業は、農業の未来に欠かせない技術ですが、それらはあくまでも基本となる農業教育を受けた上で習得するものです。農業専門学校における教育の基本は、作物にかける愛情を指導者の背中や指先に見ることであり、教科書を使って書物から必要な農業知識を習得できる社会人としての訓練であり、また、収穫の感謝と感動と笑顔を肌で感じることはないでしょうか。この農業教育の基本を踏まえた上で、本校では先端技術（スマート農業）を先導する企業様と技術開発や実地試験で多くの提携をしています。その活動の中で、スマート農業やインターネット、ドローン技術などを駆使する新しい先端農業技術の教育を行っています。これからも、優れた先端技術を持つ企業様のご協力の下に、最大限の知恵と汗を使って、新しい時代、農業の未来を担う力強い若者を育てるため努力して行きます。